



炎の蜃気楼 パラレル

# ご主人様 調教 体験版

「ところで、仰木君」

「はい？」

おもむろに、直江が話をきりだした。真剣な顔になる。高耶もつられて、おもわず正座してしまった。

「君と契約を結びたい。実は、妹さんとお父さんにはもう理解を得ている」

「な…？」

高耶には、直江の言葉の意味が理解できずにいた。唐突な申し出に戸惑いを隠せない。

「いきなりで、すまない。長くなるが、いいかな？」

直江は酒を口に含む。煙草に火をつけると、真剣な面持ちで高耶を正面から見据えた。

「私は、君のバイト先のビルのオーナーをやっている。だから、ちょっと調べさせてもらって、お家のほうには了解を得たんだ。君を私の家で雇いたい、とね」

「あんたの…家？」

「ああ、君の淹れてくれるコーヒーの味が忘れられなくてね。毎朝、私の為にコーヒーを淹れて欲しい」

毎朝？オレは毎朝、この人の家に通うのかよ。高耶には、そんな考えしか浮かばない。バイトがもうひとつ、増えたようなもんか。

でも、なんで家の了解なんて…。

「今夜から、来てくれないかな？」

「こ…今夜?!」

「そう、今夜から。君は住み込みで、働くんだよ」

高耶は呆然とする。高校生で、住み込みって…。たかが、コーヒーいれんのに、住み込みかよ…。

「君の家には、お給料として月に50万。君には10万渡そう。それでは、少ないだろうか？」

「ごっ…そんな！そんな金額、コーヒー淹れるくらいで、多すぎるよ！」

直江はすました顔で高耶を見据えていた。高耶の狼狽ぶりを楽しんでいるように。煙草の煙が、ゆっくりと吐き出される。

直江はしばらく沈黙した。高耶も、直江の視線に次の言葉がでない。

「…実は、もうひとつ、条件がある」

ほらきた、と高耶は思った。コーヒーごときで60万は高すぎる。オレをこき使って、家政婦代わりにでもするつもりだろう。

どうせ、そんな事だろうと高耶は考えていた。直江の言葉を聞くまでは…。

「夜の間だけでいい…私のご主人様に…なって欲しい」

「なんて…ご…ご主人様？」

高耶は自分の耳を疑った。自分より、大人で威厳も名誉もあり雇い主でもある、この男。

自分をご主人様にしたいなんて。いったい何を考えているんだ？

「私はね、常に人の上に出てきた。だから、人に従うことに憧れがある。やっと、自分の主人にふさわしい人を見つけたんだ」

「……」

「それが、君だ。仰木高耶君」

直江の真摯な眼差しに、高耶は吞まれたように、首を縦に振っていた。

直江は立ち上がると、高耶の手を取る。

うやうやしく掲げると、今度は手の甲に口付けた。

「貴方の魂に忠誠を…そして、貴方の身体には極上の快樂を…」

「お前…何言って…」

「でも、すぐには差し上げられません。下僕には、下僕なりの楽しみがありますから。」

楽しみは、ゆっくりと味わいたい。それくらいは許していただけますか？」

直江の瞳。鶯色の、優しい光をたたえて高耶を見つめる。先程の危険な色は、すっかり隠して。

高耶は迷った。

先程のセリフがひっかかる。オレは主人役じゃないのか？

「直江、あんた…何がしたいんだ？」

「駄目ですよ、高耶さん。私は下僕。もっとぞんざいに扱ってくださって構わない。」

お前、と…」

直江は徹底したいらしい。高耶が主人である事に、かなり固執している。

直江は身体を起こすと、すいと手を伸ばし、高耶のアゴに指をそえて上向けた。

「なっ…お前、主人に対して…」

「ご主人様…だからですよ。私は貴方に忠誠を誓いました。身も心もすべて。」

主人である貴方が、愛おしい…。その魂に、心を奪われた。貴方の姿かたち、すべてが崇高だ。

そんな崇高な存在である貴方を…汚したい」

高耶の身体が、ピクリと震えた。また、あの危険な光が、直江の瞳に灯る。

いきなり、直江が高耶の唇を奪った。  
ソファに押さえつけられる格好で、高耶は身動きがとれない。  
「んんっ！…んあっ…」  
高耶の言葉を遮るように、直江の唇が執拗に高耶のそれを舐る。  
情熱的な…そう言ってしまうは簡単だが、それとは違う。  
高耶は生まれて初めてのキスに気が動転していた。

「いいんですよ、それで。そのプライドこそが、貴方がご主人様たる所以なのだから。

快楽に声をあげて、腰を振って強請るのは、淫蕩な女だけでいい」  
直江の指が輪を作り、高耶の幹を抜き上げる。  
高耶のそれも硬度を増し、先から透明な蜜を滲ませ始める。  
くちゅくちゅと、淫らな音が高耶の耳にとどき、高耶は耳を覆いたくなった。  
だが、両手の戒めは解けない。

「ん…やめ…はあっ…」  
「やめてなんか、あげない。貴方は、拒んで。私が汚すから。  
——そして、いつか…貴方は淫売のように私にせがむんです」

「そんなの…ない…」

「さあ、どうでしょうね…」

高耶の背は、弓なりに反らされた。  
高耶の幹を、直江の熱い粘膜が包み込んだからだ。

舌がねっとりと絡みつく。

「うあ…はっ…ああ…あっ………」

舌先を使い、先の割れ目を刺激する。

指が幹を抜き上げた。

高耶は必死に喘ぎを押し殺した。  
悔しさで、目じりには涙を浮かべている。  
悔しいのに…身体が、快感に逆らえない。  
初めての刺激だった。  
自分で慰めることも、めったにしない高耶だ。  
他人からの刺激なんて、キスもまだの高耶には衝撃的だった。  
「や…やだよ…もっ…」  
直江の指が下へと降りる。  
高耶の、狭い蕾へとあてがわれた。  
いつの間にか、ゼリー状のものが塗られている。  
つぶと、直江の指が高耶の内部へと挿入された。  
「っ…はっ…あ…あああ…」  
ものすごい違和感が高耶を襲った。  
異物が、体内で蠢いている。  
内壁を擦り上げられる未知の感覚に、高耶は身震いした。  
「や…かっ…はっ…」  
言葉にならない音が、唇からもれる。  
しかし、前に加えられる快感に、身体がばらばらに反応する。  
「ああっ！」  
直江の指が、内側の一点を探り出す。  
指で引っ掻くような刺激に、高耶の身体がビクンと反応した。  
「な…に…？」  
「ここがね…貴方の天国…」  
直江はなおも、刺激を与えた。前にも、後ろにも…。  
高耶の身体は、とめどない射精感に襲われた。  
もう、自分では止めようもない、快樂の波にさらわれる。

若い体液が放出される。

高耶の身体はガクガクと痙攣するが、後ろに加えられる刺激は高耶を開放してはくれなかった。

「ああああっ…もう…だ…やめっ…」

射精の瞬間の強烈な快樂が、いつまでたっても引かない。

目の前が真っ白になる。

もう、このまま、死んでしまうのではないか。

そう思った高耶だったが。

高耶は、いつしか意識を手放してしまっていた。

「くっ…うう…は…っ」

高耶の息が詰まる。今まで味わった事のないような異物感。

今は体温と同化してしまって、その存在はハッキリと感じる事はできない。

ただ、体内にある物体への言い知れない異物感拭えなかった。

————— 苦しい

高耶のは呼吸さえままならないほどの、苦しみに耐えた。

額から頬へと、汗が伝う。

「そんなに苦しい？ 仰木君。————— 楽に、なりたい？」

「うあ…も…やだ…」

「違うだろう、仰木君。ちゃんと、お願いしないと」

直江は高耶の顔を見下ろしながら、さも、情けをかける風で言っのける。

高耶は悔しかった。悔しくて、直江を睨みつける。

なにか怒鳴ってやろうと口を開くが、漏れるのは、情けない吐息と途切れ途切れの言葉だけ……。

「そんな——扇情的な顔をしないでほしいな。私の決意が揺らいでしまう。君に優しくしてあげたくなってしまわないか」

「じゃ……もう、こんなの……やめ……て」

涙目の高耶の頬を、直江の大きな手が包み込む。

高耶は、これで開放されると思った。

優しい、暖かな手の感触。この手になら、素直になれる。

だが——

「駄目だよ、高耶君。お願いできたら、ちゃんと考えてあげる」

「——」

高耶の目が、キッと直江を睨みつける。

やっぱり、コイツはいかれている。コイツのご主人様ごっこに、とことん付き合うしかないのか？

そうするしか、今の状況から逃れる術はないのか？

「くっ……お願い……す」

「ん？聞こえないよ？——ちゃんと、聞こえるように」

高耶のはらわたは煮えくり返る。

眉間に縦皺を深く刻みながら、高耶は唸るように懇願した。

「ご主人……様、お願いしま……す」

「ふふ……いいだろう。良く言えたね」

満面の笑みを浮かべる直江。

何人の人間が——特に女性が、騙されてきたんだろう。

高耶はいっそう、その笑顔を睨みつけた。

「な————」

手足を拘束され、思うように動けない高耶は、直江の手によって彼の前に膝まづかされた。

高耶の目の前に、晒されたもの。

直江は恥ずかしげもなく、下半身のそれを露出している。

しかもそれは、すでに十分な硬度と角度を持ち、直江の興奮を示しているのだった。

「何を————」

高耶はどうしたらよいのか、わからなかった。

昨夜、直江の口淫によってイカされた自分であったが、直江のものにも同じ事をするなんて————なんでオレが、男のものをしゃぶらなきゃなんねえんだ。

でも————そうしないと、この体内の異物が————

「どうした、高耶君？わかるよね、君なら。私を楽しませなさい」

「う・・・」

嫌悪感しか湧いてこなかった。女の身体にも興味はあまりないが、男の身体なんて、なおさらだ。

しかもコイツの所有物ときたら————でかくて、てらてら光って————

高耶の喉が、思わずゴクリと鳴った。

「ほら————欲しくなってきたんだろう？さあ————」

「ちが————そんなんじゃない————」

悔しい。殺してやりたいほど憎らしい。

しかし、高耶の心の奥底で、暗い炎がちろちろと燃え出した。

自分でも説明のつかない、底知れぬ恐ろしさを伴う感情。

興味本位？いや、違う。仕方なく、だ。高耶は自分に言い聞かせる。

高耶はおずおずと、舌を突き出し、直江のそれに這わせた。

「ん……」

普通の皮膚と違う舌触りに、不思議な感情が沸いた。

猫のように、ぺろぺろと直江の幹に舌を這わす。

初めての経験に、どうしてよいかわからない。

ただ————舐めているうち、次第に舐める事に夢中になり始めた。



自分の体内に納まっている異物の事など、すっかり失念して。

「ん…ふっ……んんっ……んっ」

知らず、声が漏れる。

（あれ————オレ…変？）

ぺちゃぺちゃとミルクを飲む猫の様な高耶の髪を、直江は満足気に指で梳いた。

「そう————上手だね、高耶君。でも、これじゃ私はイケないな」

ぼんやりと霞のかかったような瞳で、直江を見上げる高耶。

そんな間にも、舐める作業は止まらなかった。

「ほら、また——そんな顔をする。私の自制心だって、限界があるんだよ？」

直江の言葉の意味がわからない。これ以上、なにかするとか？

「ちゃんとその口で、啜えて。口いっぱいに頬ばって」

高耶は躊躇した。自分もついているのだから、見飽きているほどのものなのに。コイツのは、なんだか自分のとは違う。

だが、高耶の躊躇は嫌悪感からではなくなっていた。

一瞬のためらいの後、ゆっくり、先のほうから飲み込んでいく。

口をいっぱいにあけても、口の端が切れそうだ。

「ぐっ・・・んんっ・・・う・・・」

なんとか喉の辺りまで飲み込んだが、根元まではまだまだ・・・。

「そう——そうやって素直にね。今度は舌を使って——

全体に絡めて。顔を上下させてみなさい」

高耶は言われるがままだった。

プライドは砕け散り、口の中いっぱい収まった、直江自身に心を奪われている。

言われるがまま、舌を蠢かせる。

鼻に届く、直江の男の香り。先の窪みから滲む、液体の味。

高耶の思考は蕩けて——

「んっ・・・ふ・・・んん・・・んっ」

この口淫によって、高耶の神経は麻痺していく。

口の中が性感帯になったよう。口腔の神経全体で、直江を感じた。

「まだごちない——でも、それが堪らない」

「んっ・・・」

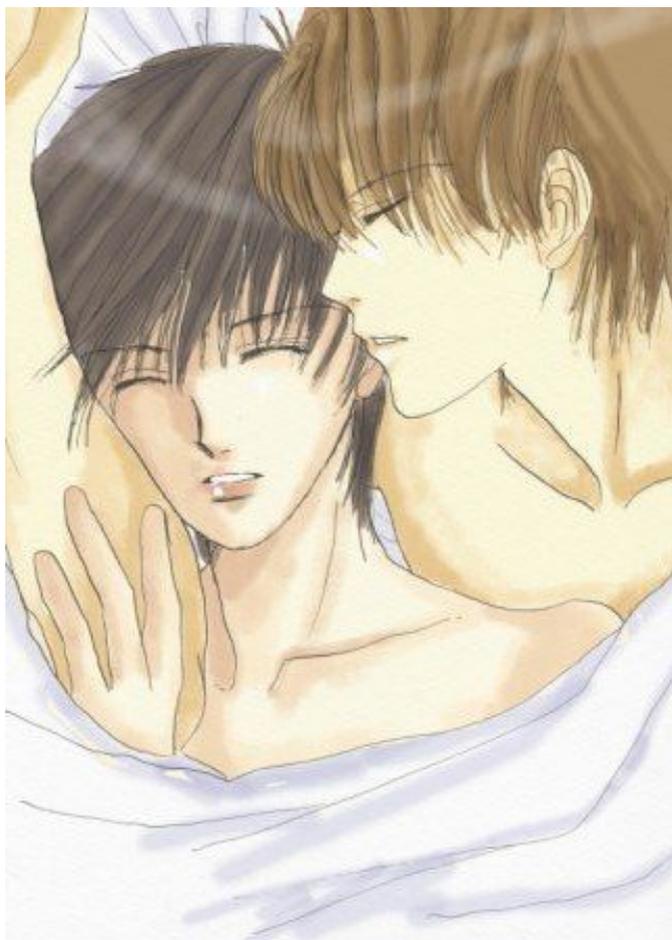
トロリとした目で見上げる高耶。口には、直江の欲望が収まったまま。

Happy Birthday takaya

Loving You ■■■ Naoe



目が覚めると、腕の中に貴方がいる。  
朝の柔らかい日差しに、柔らかな黒髪が艶やかに揺らめく。  
夜の貴方は臆病で、でも私には素直に身を委ねてくれる。  
貴方がすべてをさらけ出せるのは、私の前だけ。  
貴方が何もかも委ねて、安心できるのは私の腕の中。



「ん…なお…え？」

貴方が目を覚ます。もう少し、安らいだ寝顔を見ていたかった。

でも、貴方の瞳が私を映すのは、もっと見たい。

「おはようございます、高耶さん」

私は優しいキスの雨を降らせる。

くすぐたげに、微笑みながら貴方はそれを受け止めた。

「も…いいよ…これじゃ…」

「これじゃ、昨夜の続きが始まりそう？」

「！…馬鹿っ！」

ふざけて言ってみたものの、半分は本気だ。

でも、かわいらしく照れてタオルケットを被ってしまった貴方。そんなところが、本当にかわいい。

「冗談ですよ…今日は出かける予定ですからね。仕度をしないと…」

「あっ！ そうだった」

慌ててタオルケットを跳ね除ける。私がクスクス笑っていると、ふてくされたようにプツと膨れる。

「ご機嫌、直して…高耶さん」

# 一週間

日記風 直江が書いている設定です。ある方からのリクエストです。

先週 1 週間、つまり 9 月 17 日から 24 日までの、2 人の行動をお知りになりたいとの事。

御意。

9 月 17 日(月)

この日は朝から予定が詰まっております。

日曜日を高耶さんと過ごし、私が自宅へ帰ったのは朝 10 時近かったと思います。前日、調伏を終えた私達は、夕食もそこそこにホテルへと向かい朝まで過ごしたわけですが、高耶さんの学校もありますから、間に合うよう松本まで送りました。それからウィンダムを飛ばして宇都宮まで。結構なハードスケジュールでしたね（苦笑）

この日、法事が2件、入っていました。大切な檀家さんですから、手は抜けません。私は手伝い程度でよいのですが、あいにくこの日は誰もいないので、私が供養させていただきました。

法事が終わったのが、4 時頃、だったでしょうか…。

高耶さんも、学校から帰っているころなので、ご自宅に電話をしてみました。

でも、美弥ちゃんがでて、まだ帰宅していないという。

そこで、今度は携帯に電話を入れてみました。

「もしもし、直江です」

「ああ」

「今、どちらですか？」

「どこだっけいいじゃねえか。何の用だ？」

昨日の夜の高耶さんとは別人のような、不機嫌な声。

コレは近くに誰かいるな、と感じました。

「いえ…ただ、声が聞きたくになりました」

「なら…もういいな」

そう言うと、ぷつりと切れる通話。

何か不都合な場面だったのだろう。私はそう考えることにして、携帯をしまいました。

夕食はキンキの煮付けやインゲンの胡麻和えなど。

母の手料理は、本当にありがたいとおもいます。

兄達も帰宅し、久しぶりに皆で囲む食卓に、胸が熱くなりました。当たり前の幸せ…大切にしたいと。

ひと眠りして目が覚めてしまった私は、久しぶりに自宅でPCを開きました。

メールは…迷惑メールばかり。

私に女性を紹介したって、無駄なのに…。

と、長秀からのメールが入っている事に気づきました。

【件名】怨将発見

【本文】直江、お前あんな時間に携帯鳴らすのはやめてやれ。補習受けてたんだぜ。お前から電話があれば、でないわけいかねえだろう。

で、本題だが、小田原で北条の残党が動きだす気配だ。お前も調べてみてくれ。

以上

なるほど。補習中だったんですね。だから、あんな…でも、私からの着信に、しっかり出てくれた。

さて、北条の残党の事を調べなければ・・・。

そう、思った時でした。

あの人専用の曲が部屋に鳴り響きました。

携帯が高耶さんからのメールを知らせます。

『さっきはごめん。声、聞けて、オレも嬉しかった』

ぶっきらぼうな、でも高耶さんらしいメールでした。

補習だった事など、いっさいの言い訳はしない。

『貴方の声が聞きたくて、思わずかけてしまいました。すみません。でも、ご都合もあるでしょうから、今度はメールにします。今度声が聞きたくなくなったら・・・直接、会いに伺います』

そう、返信する。

だらだら、長いメールを嫌うのは知っているから。

私はPCに再び向かい、調べ物を始めた。小田原での怪奇現象など、調べてみる。

どうやら、小者らしい。北条の武将は出てきてはいないようでした。これは軽く・・・

再びメール着信。

「だったら、早く会いに来い」

それだけ。さっきの私の返事から、もう 30 分以上経っていました。その時間の分だけ、あの人が携帯片手に悩んでいる様子が目に浮かびました。

短い文章の中に、あの人の想いが詰まっている。

そう思うと、私は……

気づくともうすぐ零時になるところ。

私は急いで着替えを済ませました。

「御意」

それだけ送信すると、私は車に乗り込み、松本へと向かったのです。